Special Feature 特別企画

地域を支える「かかりつけ管理栄養士」という挑戦
「管理栄養士と開業医がコラボする会」の役割とは

病院では栄養管理が行き届いても、退院後の地域には〝栄養の受け皿〟が乏しい――。その課題に挑むのが「管理栄養士と開業医がコラボする会」だ。クリニックに管理栄養士を配置し、外来から在宅、看取りまで伴走する「かかりつけ管理栄養士」という構想。医師との協働で地域医療を支える新たなモデルを追った。

「第6回管理栄養士と開業医がコラボする会」の様子。フリーディスカッションで多職種間で議論を深める

管理栄養士がクリニックにいる――。それだけで地域医療の風景はどこまで変わるのか。その問いに真正面から挑んでいるのが、「管理栄養士と開業医がコラボする会」だ。発起人の1人であるのが大阪樟蔭女子大学健康栄養学部健康栄養学科の井尻吉信教授（栄養学博士／管理栄養士）。井尻教授が提唱するキーワード「かかりつけ管理栄養士」について語ってもらった。

地域に〝栄養の受け皿〟がないという現実

井尻教授が問題意識を抱いたのは、病院や老健施設で手厚い栄養管理を受けた患者が、退院後にその計画を十分に引き継がれないまま在宅生活へ移行している現状だった。外来通院は続いていても、地域に身近な栄養・食事相談の場が少なく、いわば〝野放し〟の状態に置かれるケースが少なくない。結果として状態が悪化し、再入院に至る――。こうした光景を、井尻教授は20年以上にわたる臨床現場で数多く目にしてきた。

自身が複数のクリニックで栄養食事指導に携わってきた経験から、「管理栄養士が介入すれば確実に治療効果が上がる患者がいる」と実感してきたという。患者だけでなく主治医からも喜ばれる経験を重ねる一方で、クリニックや在宅分野に管理栄養士がほとんどいないという事実を体感的に感じていた。

そこで2013年、東大阪周辺の6市の内科リニックを対象に調査を実施。栄養食事指導を実施していない施設が約60%にのぼり、管理栄養士が配置されていたのはわずか8%だった。その後、2016年の診療報酬改定を契機に流れは徐々に変わり、2021年の再調査では15%まで増加。ニーズの高まりが数字にも表れ始めている。

発起人である大阪樟蔭女子大学の井尻吉信教授

クリニックに一人以上の管理栄養士を

井尻教授が描く解決策は明快だ。「地域のクリニック（内科・整形外科・歯科など）に一人以上の、管理栄養士を置くこと」。高血圧などで毎月通院する高齢患者が、気軽に食事相談できる環境を整える。病院からの情報を受け取る〝栄養の窓口〟ができれば、退院後も継続した栄養管理が可能になる。

さらに、通院が困難になれば医師の往診に同行し、在宅訪問栄養食事指導へとシームレスにつなぐ。外来から在宅、そして看取りまで伴走する存在――それが「かかりつけ管理栄養士」だ。50代・60代で出会った患者と長期的な信頼関係を築き、人生の最終段階まで寄り添う。通院時から嗜好や価値観を把握しているからこそ、最期に提供できる「こころの栄養（その人にとっての思い出の食）」があるという。

会場参加者らによる記念撮影。Face to faceでの対話が新しい連携を生んだ

クリニックに管理栄養士を配置するメリットは多い。

第一に、生活習慣病やフレイル、サルコペニアの進行抑制と治療効果の向上が期待できること。

第二に、診察室では見えにくい患者の本音や生活背景を引き出せる点だ。医師の診察時間が5分程度であるのに対し、管理栄養士は1時間近く対話することもある。その中で得られた生活情報のエッセンスを医師へ共有することで、診療の質が高まると評価されている。

第三に、対面だけでなくオンライン栄養食事指導でも診療報酬が算定できること。仕事の都合で通院が難しい患者に対し、時間外のオンライン支援が効果を上げている例もある。

「常勤での雇用は難しい」という声に対しては、非常勤やフリーランスとして複数クリニックに関わる形も提案する。また常勤の場合も、業務を栄養食事指導だけに限定せず、診療補助や受付、医療事務などを兼務しながら〝栄養食事指導もできるスタッフ〟として機能することが、クリニックにはなじみやすいという。実際、医師と看護師以外は全員管理栄養士という体制の診療所もあり、スタッフ全体の質向上にも寄与している。

多職種連携を深化させる場

こうした理念のもと立ち上げられたのが「管理栄養士と開業医がコラボする会」である。発足以来、年1回の研究発表会を開催。糖尿病内科、循環器内科、腎臓内科、総合診療の医師や歯科医師、診療所・病院・薬局・在宅など多様な現場の管理栄養士が登壇し、最前線の取り組みを共有する。フリーディスカッションでは職種の垣根を越えた議論が展開される。

昨年8月の第6回研究会は、会場とオンラインのハイブリッドで実施。約90人が参加し、会場となった大阪樟蔭女子大学には医師や管理栄養士、歯科医師、歯科衛生士ら約60人が集った。

また、クリニックで〝ひとり職場〟になりがちな管理栄養士の横のつながりを築くため、2021年には「繋がる『クリニック管理栄養士』（つなかん）」を発足。3カ月に1回のオンライン開催（無料）で、日本各地から約50人が参加し、悩みや成功事例を共有する相互支援コミュニティへと成長している。

「外来での栄養食事指導はもちろん、在宅、そして看取りまで寄り添い、指導ではなく〝支援〟として伴走できる管理栄養士が必要です」と井尻教授は語る。超高齢社会において、「最期まで自宅で、最期まで自分の口で食事を楽しみたい」という願いを形にできる職種――それが管理栄養士だという自負がある。

地域医療の現場に根ざし、医師とともに患者の人生に寄り添う「かかりつけ管理栄養士」。その実装に向けた挑戦は、すでに始まっている。

管理栄養士と開業医がコラボする会は『かかりつけ管理栄養士』が活躍する未来を目指して活動しています。

動画公開中！

管理栄養士と開業医がコラボする会